

# 委員会・ワーキンググループ 議事概要（公開版）

生物多様性（種多様性・相互関係）ワーキンググループ（第1回）

平成28年9月30日

生物多様性（種多様性・相互関係）ワーキンググループ（第2回）

平成29年2月13日

平成 28 年度大台ヶ原自然再生推進委員会  
生物多様性（種多様性・相互関係）ワーキンググループ（第 1 回）議事概要

1. 日時 平成 28 年 9 月 30 日（金） 14:00 ～ 17:00

2. 場所 環境省近畿地方環境事務所 会議室

3. 参加者

【委員】

川瀬 浩 （公財）日本野鳥の会奈良支部 顧問

松井 淳 奈良教育大学教育学部 教授

村上 興正 元京都大学理学研究科 講師

横田 岳人 龍谷大学理工学部 准教授

【ワーキンググループ委員】

丑丸 敦史 神戸大学発達科学部 教授

【オブザーバー】

（一社）日本森林技術協会 中村 俊彦 専門技師

関根 亨 上席技師

【事務局】

環境省近畿地方環境事務所 榎本 和久 国立公園課長

川村 義治 生物多様性保全企画官

戸田 博史 野生生物課 野生鳥獣感染対策専門官

山脇 一浩 野生生物課 自然保護官

菅野 康祐 吉野自然保護官事務所 自然保護官

（株）環境総合テクノス 樋口 高志 環境部 マネジャー

樋口 香代 環境部 リーダー

4. 議事

（1）ニホンジカ個体数調整に係るツキノワグマ対策について

（2）訪花昆虫調査結果について（速報）

（3）地表性甲虫調査について

（4）その他

5. 概要：

（1）ニホンジカ個体数調整に係るツキノワグマ対策について

- ツキノワグマの目撃頭数を公表しておいた方がよい。

（2）訪花昆虫調査結果について（速報）

- 7月初旬までの結果では訪花昆虫はドライブウェイ沿いの木本で取れている個体数が多い。大台ヶ原の植物は下層植生が衰退しているので訪花昆虫は木本に依存している。下層植物については、

ニホンジカが食べない植物に依存している。

- 森林植生にしては小型のハバチ類が少ない。日本の森林では総個体数の半数くらいがハバチ類になる傾向がある。種数についても良い森林では 10 種類以上は取れる。ハバチ類が少ないのは大台ヶ原の元々の特徴なのかどうか不明である。
- 訪花昆虫の組成（種類の比率、個体数の比率）を他の地域と比較し、大台ヶ原の訪花昆虫相の特徴を出せるように評価すること。
- どの昆虫がどの種類の花に訪花しているのかを見る。また、ある昆虫がどこに開花している花に訪花しているのかを見れば、その昆虫のハビタットに対する依存度がわかる。

(3) 地表性甲虫調査について

- 平成 24 年度の調査結果と比較することが重要である。どのような変化があったのかをしっかりとおさえておくこと。

(4) その他

○コマドリ調査について

- 日本野鳥の会奈良支部会員、自然再生に関わる調査者、自然再生に関わる調査関連業者、ビジターセンター職員、環境省職員等らの目撃情報を元に今年度のコマドリの繁殖箇所をとりまとめた結果、東大台 5 箇所、西大台 2 箇所となった。
- このような形のコマドリ調査については今後も継続していく。

○希少植物調査結果について

- 1 箇所では人による盗採の可能性が確認されている。
- 環境省がドライブウェイから七ツ池方面への出入り口付近に自動撮影カメラを設置していたが、出入りが確認されたのはカメラマンのみであった。

○山の日制定記念及び吉野熊野国立公園 80 周年記念イベントの実施報告について

- あいにくの雨であったが、募集により 28 名の参加者が集まった。
- 今後は上北山村など地元からの参加者も増やしていきたい。
- 今年度は、環境省と上北山村主催で横田委員、松井委員、佐久間委員を講師に迎えた大台ヶ原ツアーについても実施しているが、こちらは 1 回あたり 50 名程度の参加者が集まった。公共交通を使うことを前提としたツアーであったが、近鉄、奈良交通ともに協力を頂き好評であった。

以上

平成 28 年度大台ヶ原自然再生推進委員会  
生物多様性（種多様性・相互関係）ワーキンググループ（第 2 回）  
議事概要

1. 日時：平成 29 年 2 月 13 日（月） 10:05-12:10
2. 場所：大阪マーチャンダイズ・マート（OMM ビル）8 階 近畿地方環境事務所 大会議室
3. 出席者

【委員】

川瀬 浩 （公財）日本野鳥の会奈良支部 顧問  
野間 直彦 滋賀県立大学環境科学部 准教授  
松井 淳 奈良教育大学教育学部 教授  
横田 岳人 龍谷大学理工学部 准教授

【ワーキンググループ委員】

丑丸 敦史 神戸大学発達科学部 教授

【オブザーバー】

（一社）日本森林技術協会 中村 俊彦 専門技師  
佐藤 里沙 技師

【事務局】

近畿地方環境事務所	鑪 雅哉	野生生物課長
	榎本 和久	国立公園課長・自然環境整備課長
	川村 義治	生物多様性保全企画官
	戸田 博史	野生生物課 野生鳥獣感染症対策専門官
	山脇 一浩	野生生物課 自然保護官
	菅野 康祐	吉野自然保護官事務所 自然保護官
	井藤 大樹	吉野自然保護官事務所 自然保護官補佐
（株）環境総合テクノス	梅迫 泰年	チーフマネジャー
	樋口 香代	リーダー
	岸田 洋弥	

4. 議事

- (1) 訪花昆虫調査結果について
- (2) メッシュ調査結果について
- (3) 地表性甲虫類調査結果について
- (4) ハバチ類調査について
- (5) 今後のモニタリングについて

## 5. 議事概要

### (1) 訪花昆虫調査結果について

- ・ ハナバチが少ないのが大台ヶ原の大きな特徴である。森林生態系ではハナバチは普通3～4割程度であるが、ここまで少ないのは珍しい。花が全体的に少ないのが要因ではないか。柵内では花が多く、柵の設置による効果として重要である。柵外では顕著にハナバチがとれない。
- ・ 木本依存の昆虫は多くとれている。尾根上ではシカの食害が少ないときでも、ササが繁茂し林床での開花は少なかったと考えられるため、訪花昆虫にとっては谷部の草本が重要だったと考えられる。
- ・ 開花は明るい環境に多い。ドライブウェイは訪花昆虫の多様性に貢献している。谷部は花にとって重要であるため、シカが入らないような工夫が必要である。
- ・ 試験的な小規模柵が12ヶ所程度設置されており、古いものでは設置して10年以上になる。低木が2～3mほどになり、花が咲き始めている。ギャップを花資源の供給元として守るべきである。
- ・ 柵内でハナバチが多くとれているのは多様性保護柵の一つの成果である。ギャップ地を中心に下層植生を回復させるのは効率がよい方法といえる。

### (2) メッシュ調査結果について

- ・ コケの減少は重要である。樹幹着生のコケが減少しているかどうかは不明である。コケの減少の要因が乾燥なら樹幹着生の種も減少するはずである。変化がないならば、土壌の流出による可能性があるため、調査を検討する必要がある。
- ・ ミヤコザサの稈高が1mになっているというのはかなり大きい。地下部の蓄えが多いのかもしれない。注意が必要である。

### (3) 地表性甲虫類調査結果について

- ・ オオクロナガオサムシとササ被度の関係についてはデータの取り方がこれまでと違うため、無理に考察をせずに結果報告だけでよい。

### (4) ハバチ類調査について

- ・ 内藤先生に大台ヶ原とハバチについての文章を依頼しており、3月上旬には文章ができる予定である。

### (5) 今後のモニタリングについて

- ・ 具体的には決定していないが、シカがクマに食べられることがあったので、クマを対象としたヘアトラップの設置を検討している。また、地表性小型哺乳類の調査を検討している。